

11. 比較的短期間の柴苓湯投与にて完全寛解した形成陰莖硬化症（ペイロニー病）の2例

帝京大学医学部附属溝口病院 泌尿器科¹⁾
多摩泌尿器科クリニック²⁾

○大矢 和宏¹⁾、関根 英明¹⁾、野村 栄²⁾

【症例1】41歳、男性。3ヶ月来変化のない陰莖の硬結を主訴に近医受診、若年でもあり手術の可能性も考え、無治療で当科を紹介された。触診上皮下陰莖白膜に径約1cmの硬結あるも疼痛、圧痛はなかった。希望により柴苓湯（TJ-114）9g、ニコチン酸トコフェロール300mg分3投与したところ、2週間で著明に縮小、4週間目の再診時には硬結を触知しなくなっていた。念のためもう4週間投与継続し、中止としたが再発を認めていない。

【症例2】31歳、男性。尿潜血精査を希望して当科を受診した時に、陰莖背部に硬結があり、勃起痛をもあると訴えた。触診上陰莖背部の上皮下白膜に径約1.5cmの硬結があり、ペイロニー病と診断した。尿潜血については超音波にて異常所見なく、尿細胞診でもクラスⅡであり、そのまま経過観察とした。ペイロニー病については柴苓湯（TJ-114）9g分3投与したところ、1ヶ月後の再診時には硬結、勃起痛ともに消失していた。念のためもう4週間投与継続したが再発を認めていない。

【考察】ペイロニー病は陰莖白膜の繊維化性疾患であるが、その原因は不明である。今回我々は繊維化性疾患に有効なステロイド効果がありステロイド特有の副作用が少ない柴苓湯（TJ-114）を用いることにより比較的短期間でペイロニー病寛解した症例を経験したので報告する。

「六君子湯による食欲・消化管運動改善効果」

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 心身内科学
浅川 明弘

グレリンは、1999年に成長ホルモン放出促進因子受容体（2005年、グレリン受容体に改称）の内因性リガンドとして胃より同定された、28個のアミノ酸より成るペプチドで、3番目のセリンがオクタン酸によってアシル化されている。ヒトのグレリン遺伝子は3p25-26に存在し、4個のエクソン、3個のイントロンより構成される。グレリンの組織での発現は胃に最も多く、その他、十二指腸、小腸、大腸、肺、脾、腎、副腎、脂肪、精巣、胎盤、白血球、視床下部などにも発現が認められる。7回膜貫通型のG蛋白共役受容体であるグレリン受容体は、下垂体以外にも終脳、間脳、延髄、心臓、血管、肺、腸管、肝、脾、甲状腺、副腎、脾、骨格筋、脂肪、皮膚、精巣、卵巣など全身の組織に広く分布しており、その内因性のリガンドであるグレリンは、成長ホルモン分泌のみならず、摂食、体重、消化管運動、糖代謝、脂肪生成、循環器機能、記憶、学習、呼吸機能、骨代謝などの調節や様々な疾患の病態に関わっている。2008年、武田らのグループにより、六君子湯が血中グレリン濃度を上昇させることが、報告された。本演題においては、六君子湯のグレリンを介した食欲・消化管運動への作用とともに、六君子湯の今後の可能性について概説する。